大阪インターナショナルチャーチ　ダニエル・エルリック牧師　2011 年 8 月 21 日
シリーズ: 使徒言行録 #03　聖書箇所（新共同訳）: 使徒 1:12-26　Key Verse: ヘブル 11:6
タイトル: 使徒たちの信仰

I.　導入

おはようございます。これは、レオナルド・ダビンチによる最後の晩餐です。ここには、イエスと弟子たちが家の二階にある広間で食事をともにしている様子が描かれています。とても楽しそうな場面に思えますが、この後、弟子たちの信仰は大きく試されたのです。夕食の後、ゲツセマネの園でイエスは捕われました。その夜、弟子たちは皆、絶望し、誰ひとりイエスの味方だと公言しませんでした。例えば、ペトロはイエスについていくと大胆に宣言した数時間後には、泣くような始末でした。そして、次の日、イエスが十字架につけられ、弟子たちは希望を失い、敗北感を味わいました。

その後、この二階の広間は弟子たちの仮の宿となったようです。そして、ほとんどの弟子たちがイエスの復活後はじめてイエスに再会したのもこの場所です。**ヨハネ 20:19-20** を見てみましょう。**「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。」**

ヨハネ 20:26-28 も見てみましょう。**「さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。』トマスは答えて、『わたしの主、わたしの神よ』と言った。」**イエスが十字架にかけられたとき、弟子たちの信仰は大きくくじかれました。しかし、イエスが墓からよみがえられ、広間でお会いしたことで、彼らの信仰も復活しました。

「二階の広間」は、クリスチャンの信仰と交わりの象徴となりました。エルサレムでツアーに参加すると、二階の広間も観光スポットのひとつに入っていることが多いです。今そこにある建物は 12 世紀ごろに建てられたもののようですが、考古学上および歴史上の根拠を基に、ここがもともとの二階の広間の実際にあった場所だと多くの学者たちが信じています。

先週は、イエスがよみがえられてから 40 日間、弟子たちの前に何度も現れ、それから天の父のもとへ戻られたところを読みました。イエスは天に戻られる前に、エルサレムに戻って御父の約束である聖霊による洗礼を待つようにと弟子たちにおっしゃいました。今日の聖書箇所では、弟子たちが二階の広間に戻り、祈りに励みながら待っている様子が書かれています。では、使徒 1:12-26 を読みましょう。

II.　聖書箇所　使徒言行録 1:12-26, 新共同訳

1:12 使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。この山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある。1:13 彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。1:14 彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。1:15 そのころ、ペトロは兄弟たちの中に立って言った。百二十人ほどの人々が一つになっていた。1:16 「兄弟たち、イエスを捕らえた者たちの手引きをしたあのユダについては、聖霊がダビデの口を通して預言しています。この聖書

の言葉は、実現しなければならなかったのです。1:17 ユダはわたしたちの仲間の一人であり、同じ任務を割り当てられていました。1:18 ところで、このユダは不正を働いて得た報酬で土地を買ったのですが、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました。1:19 このことはエルサレムに住むすべての人に知れ渡り、その土地は彼らの言葉で『アケルダマ』、つまり、『血の土地』と呼ばれるようになりました。1:20 詩編にはこう書いてあります。『その住まいは荒れ果てよ、／そこに住む者はいなくなれ。』／また、／『その務めは、ほかの人が引き受けるがよい。』1:21 -22 そこで、主イエスがわたしたちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者の中からだれか一人が、わたしたちに加わって、主の復活の証人になるべきです。」1:23 そこで人々は、バルサバと呼ばれ、ユストともいうヨセフと、マティアの二人を立てて、1:24 次のように祈った。「すべての人の心をご存じである主よ、この二人のうちのどちらをお選びになったかを、お示しください。1:25 ユダが自分の行くべき所に行くために離れてしまった、使徒としてのこの任務を継がせるためです。」1:26 二人のことでくじを引くと、マティアに当たったので、この人が十一人の使徒の仲間に加えられることになった。

III. 教え

イエスの命令に従い、弟子たちはエルサレムに戻って御父の約束を待ちました。二階の広間には総勢 120 名ほどがいました。それは、残った 11 人の使徒たち、イエスの母マリア、イエスの兄弟たち、その他の女性、そして多くの弟子たちでした。

彼らがそこにいて祈りながら待っていたとき、ペトロは立ち上がり、教会史上初の総会と言える会を始めました。そしてペトロは、詩篇 69:25 および詩篇 109:8 を引用し、イスカリオテのユダが主を裏切った事実を振り返るとともに、12 人揃った状態で再び指揮できるようにユダの代わりが必要だと述べました。そして、選ばれる人に必要な資格について述べ、その後、人々は二人の男性を立て、最終的にはくじによりマティアが選ばれました。

マティアが使徒に加えられ、リーダーが再び 12 人揃いました。マティアの選出方法について批判する人もいるようですが、非難するべき根拠は見当たらないように思います。弟子たちはともに祈り、みことばを調べ、皆で話し合い、最終的な選択を主にお任せしたのです。この後、聖書にはマティアの名は挙げられていませんが、教会の伝承によると、グルジアのコルキスなど多くの場所で福音を述べ伝え、石打ちと打ち首によって殉教したといわれています。

教会伝承と歴史によると、一人を除くすべての使徒たちが信仰のために殉教したそうです。アンデレはギリシャのエデッサで X 形の十字架にかけられました。ペテロはローマで十字架に逆さ付けにされました。アルファイの子ヤコブはエルサレムで石打ちにされました。インドでトマスは槍で突かれました。バルトロマイ、フィリポ、そして熱心党と呼ばれたシモンはみな十字架につけられました。使徒 12:2 は、ゼベダイの子ヤコブが剣で殺されたと記しています。使徒の中では彼が最初の殉教者でした。ヤコブの子ユダは石打ちにされました。トマスと同様、マタイは槍で突かれて死にました。使徒の中でただ一人、ヨハネだけが平安な死を迎えています。殉教する一歩手前で命拾いし、長寿をまっとうしました。紀元 100 年ごろ、流刑先のエフェソでついにその人生を閉じたということです。

使徒たちがどのような死を迎えたかについては、教会伝承によるので、記録に誤りがある可能性はあります。しかし、そのような可能性を認めたとしても明らかなのは、使徒たちが人生をかけて、

よみがえりのイエスの良き知らせを述べ伝えたということです。暴力や脅威に直面しても、彼らは皆、イエスは生きておられると宣言し、その信仰のために喜んで死んだのです。

懐疑論者の多くは、イエスのよみがえりに疑問を呈します。しかし、使徒たちの信仰の証は、そのような説を打ち破ります。考えてみてください。もしイエスが十字架上で死んでおらず、墓からよみがえらなかったのなら、使徒たちはなぜよみがえりを公言し続けたのでしょうか。イエスが死からよみがえったと主張することで、この世の利益は何もありません。ユダヤの指導者もローマ帝国も復活を教えるクリスチャンを追跡し、殺していました。生けるイエスを述べ伝えることは、追われて殺されることを保証するようなものでした。

福音を述べ伝える者が望める唯一のこの世の報酬は、投獄と死でした。これほどの強い抵抗にもかかわらず、使徒たちは何をしたでしょう。皆そろって、イエスが生きておられることを述べ伝えつづけたのです。なぜでしょう。イエスが死からよみがえられたと彼らが確信していたからに違いありません。また、福音伝道に対する天の報いがこの地上のどのような苦しみより偉大だと確信していたからに違いありません。イエスのために苦しみを受け、死ぬことは、最高の栄誉と考えられていたのです。イエスが生きておられること、また彼らが死んだならイエスが天国に迎え入れてくださることを使徒たちが確信していたという前提でなければ、このようなことは理にかないません。

私自身の信仰の歩みにおいて、使徒たちの証や初代教会の殉教者の証はたいへん重要なものです。イエスについて学び始めたころ、私はまず聖書に集中し、それからイエスについての他の歴史資料を調べました。しかしあるとき、使徒たちの驚くべき証に目が留まりました。彼らは、イエスのよみがえりという真理を証することに人生を捧げたのです。彼らには、嘘をつかなければならない理由もありませんし、全員がだまされたり間違ったりするというのもあり得ません。

彼らの信仰は私に大きな影響を与え、私は彼らの証を信じるという選択をしました。それは私にとって、大きな一歩でした。それ以来、イエスが生きておられるという証拠をよりいっそう見つけてきました。生ける主と歩む自分自身の経験もそうです。今では、私は確信を持って、イエスは生きておられると宣言できます。今日、そして毎日、使徒たちとともに、イエスは生きておられると述べ伝えましょう。私たちは生ける主に仕えているのです。アーメン。

では、私たちは何をすればよいのでしょう。まず、使徒たちがしたことはわかっています。御父の約束をエルサレムで待つようにとイエスに言われた後、彼らはともに交わり、心をひとつにして祈りました。**使徒 1:14** はこう書いています。**「彼らはみな、婦人たち、特にイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちと共に、心を合わせて、ひたすら祈をしていた。」（口語訳）**この箇所を注意深く検証してみましょう。誰が祈っていたでしょう。全員です。いつ祈っていたのでしょう。ひたすら、つまり、絶えずずっとです。どのように祈っていたでしょう。心を合わせてでした。**「彼らはみな、･･･心を合わせて、ひたすら祈をしていた。」**

兄弟姉妹の皆さん、私たちもこれを学ぶ必要があります。私たちは、ともに祈るときを持つことを学ばなければなりません。主に向かって、「主よ、祈り方を教えてください」と切に求める必要があります。使徒言行録の学びを続けるにあたり、ともに祈る機会を設けていきたいと思っています。みなさんがご参加くださることを願います。集団の祈りは個人の祈りに取って代わるものではありません。しかし、集まってともに祈ることはとても大切です。そして、私たちがともに祈ることを本当の意味で学べるようにと私は願っています。

主とともに歩み、どのような状況でも主を信頼することを、祈りの中で教えられます。今日の聖書箇所で、イスカリオテのユ

ダを失った状況に弟子たちがどう対処したかがわかりました。ユダの裏切り、そしてその後の自殺は、弟子たちにとって非常に辛いできごとだったでしょう。何といっても、弟子たちはユダと 3 年間もともに過ごしたのですから。しかし、ともに祈り、みことばを学び、そして、ユダの務めを誰かに継がせる決断を彼らはしました。そして、ユダとその行いについては、神の御手にお任せすることにしたのです。

ところで、この箇所と福音書では、ユダの死に方について書かれていることが違っています。しかし、それは矛盾ではありません。**使徒 1:18** にはこうあります。**「ところで、このユダは不正を働いて得た報酬で土地を買ったのですが、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました。」**一方、マタイ 27:5 には、ユダは祭司長たちに金を返して首をつったとあります。

批評家たちは、このような違いは聖書に見られる矛盾だと主張します。しかし、少し考えればこの記述に矛盾がないことがわかります。実際、このような違いが証明するのは、これらの記述が個々の証人による各自の言い分であるということです。これは記述の信憑性を証明するものです。なぜなら、話を合わせて同じものにしようとする努力や陰謀がなかったことを示しているからです。ユダの死については、ユダが祭司長たちから間接的に土地を購入し、首をつったが、その後ロープが切れて、落ちて体が裂けたと考えれば、まったく矛盾はありません。マタイはその時起こった出来事を記していますが、使徒に書かれているのは、最終的な結果だけです。

使徒たちが生死をかけて信仰の力強い証をしたことについて少し話しましたが、今日の聖書箇所の初めの部分にもそれが見られます。**使徒 1:4** はこのように語っていました。**「そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。『エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。」**弟子たちはすでに、自分たちの使命は地の果てまで福音を携えていくことだと聞いていました。しかしまず、彼らは聖霊を待たなければなりませんでした。今日の聖書箇所で、弟子たちはエルサレムの二階の広間に集まり、祈りながら待っていたのです。これこそ、従順です。待ちながら、祈り、みことばに導きを求めていました。従順、祈り、交わり、みことばの学び、これらはすべて彼らの信仰を表しています。イエスが死なれ、弟子たちの信仰は失われました。しかし、よみがえりの主にお会いして、彼らは信仰を取り戻したのです。そして、使徒 2 章で、聖霊が力をもって臨まれるとき、彼らの信仰から行動が生まれる様子を見ることができます。イエスは生きておられると、すべての人に大胆に証していくのです。

信仰は、クリスチャンの人生に不可欠です。**ヘブル 11:6** が語るとおりです。**「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならないからです。」**使徒たちは信じていました。彼らは固く信じていました。イエスが死からよみがえられたことを疑う余地もなく知っていたからです。それは、彼らが主とお会いし、話し、触れ、そしてともに食事をしたからです。

よみがえった主イエスにお会いするのはすばらしい祝福ですが、イエスは何とおっしゃったでしょう。**ヨハネ 20:28-29 「トマスは答えて、『わたしの主、わたしの神よ』と言った。イエスはトマスに言われた。『わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。』」**お気づきでしょうか。イエスを見ないのに信じることで受ける私たちの祝福は、よみがえりの主を見た使徒たちの祝福よりも大きいのです。なんとすばらしいことでしょう。

私たちはイエスをこの目で見ることはできませんが、信じるべき根拠が与えられていないわけではありません。使徒たちの証が与えられています。また、多くの信徒たちの証もあります。そして、みことばの証が与えられています。**ヨハネ 20:30-31** にこうあります。**「このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」**聖書が書かれたのは、私たちがイエスを信じ、その御名によって永遠のいのちを受けるためなのです。聖書は神からの私たちへのラブレターです。ですから読みましょう。そうすれば、きっと祝福を受けます。読んで、書いてあることについて祈りましょう。そうすれば、日々、あなたの心に信仰が育っていくでしょう。

IV.　結び

最後に、**イザヤ書 40:28-31** を読んで終わりたいと思います。イザヤのことばに耳を傾けてください。きっとみなさんの祝福となるでしょう。

イザヤ書 40:28-31「40:28 あなたは知らないのか、聞いたことはないのか。主は、とこしえにいます神／地の果てに及ぶすべてのものの造り主。倦むことなく、疲れることなく／その英知は究めがたい。40:29 疲れた者に力を与え／勢いを失っている者に大きな力を与えられる。40:30 若者も倦み、疲れ、勇士もつまずき倒れようが 40:31 主に望みをおく人は新たな力を得／鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。」

では祈りましょう。

V.　祈り